

「潜伏疑問」の構造と派生

西垣内 泰 介

神戸松蔭女子学院大学

【要旨】「潜伏疑問」の構造と統語的派生を示し、それに関与する統語的・意味的現象を明らかにする。本論文で主張するのは、「潜伏疑問」が「指定文」と平行した特性を持っているということである。「指定文」と「潜伏疑問」の統語的派生の中核となる「関数名詞句」と呼ぶ名詞句の構造を示し、「潜伏疑問」を「関数名詞句」から派生する統語的プロセスとその諸相について考察し、「潜伏疑問」の主要部、その統語的範疇について検討する。また、「潜伏疑問」が「疑問節の島」(*wh-island*)の制約の効果を示すことを指摘する。さらに、ある種の「指定文」に見られる「構造的連結性」(connectivity)の問題を考察し、その「構造的連結性」が「指定文」が「潜伏疑問」とそれに対する答えからなる構造を持つと考えることで解明されることを示す。「潜伏疑問」の意味的特性について考察し、それらが本論文で展開する統語的分析から帰結することを主張する*。

キーワード：潜伏疑問, 指定文, 関数名詞(句), 島の制約, 構造的連結性

1. 「潜伏疑問」と「指定文」

1.1. 「集合」の概念

この論文では次のような言語表現について考察する。

- (1) a. 日本の首都
- b. 洋子の趣味
- c. タカシの欠点

これらの表現は、「値」を表す表現を焦点とする「指定文」を形成することができる。

* 本論文の内容の多くは日本英語学会 35 回大会シンポジウム『意味と統語構造のインターフェイス』, Olinco 2018 (The Olomouc Linguistics Colloquium, Palacký University, Czech Republic) で口頭発表した英語の「潜伏疑問」の分析が土台となっている。中島平三, Alec Marantz 両氏によって個別に指摘されたポイントが 3.2 節の「島の制約」の議論のインスピレーションとなった。

いつもながら、多くの同僚・友人によるコメントの恩恵を受けている。Nigel Duffield, Joseph Emonds, 郡司隆男, 日高俊夫, 金水敏, 澁谷みどり, Philip Spaelti 各氏に謝意を表したい。査読者のおひとりからは数々の洞察に富むコメントを頂いた。随所に引用・言及させて頂いたこれらのコメントの価値は計り知れないものである。

本論文につながる研究は、日本学術振興会 科学研究費補助金「「視点」にかかわる言語現象と理論言語学」(基盤研究 C 2018 年度～2022 年度, 代表者: 西垣内 泰介) および同補助金「モダリティと視点に関わる言語現象と統語構造の多層性」(基盤研究 C 2016 年度～2020 年度, 代表者: 遠藤喜雄) による助成を受けている。

- (2) a. 東京が日本の首都だ。
 b. 海外旅行が洋子の趣味だ。
 c. おこりっぽいことがタカシの欠点だ。

本論文では、「首都」を国（名）と都市（名）の「関係」を表す2項述語であると考え、「日本の首都」は次のような、集合の表示で表されるものである。

- (3) $\{x \mid \text{首都}(\text{日本}, x)\}$

この表示は、「日本」と「首都」という関係を持つものの集合を表しており、この集合における「変項」xの「値」を「東京」とするのが(2a)の意味だということになる。同様に、「趣味」は「人」と活動内容、「欠点」は個体と特性の間の関係を表す。

(1)の表現は「潜伏疑問」(concealed question)の意味を持つことができる。

- (4) ジョンは $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 日本の首都} \\ \text{b. 洋子の趣味} \\ \text{c. タカシの欠点} \end{array} \right\}$ を調べている。

このような文は、次のような間接疑問節を含む文と共通した意味の要素を持っている。

- (5) ジョンは $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. どこが日本の首都か} \\ \text{b. 何が洋子の趣味か} \\ \text{c. 何がタカシの欠点か} \end{array} \right\}$ (を) 調べている。

(4a-c)に見られるように、発音される形式としては名詞句でありながら間接疑問節の解釈を持つような言語表現を「潜伏疑問」と呼ぶ。

Karttunen (1977) は、疑問文の意味は真である答えの集合を外延として捉えられるとしている。これによると、(4a)の「日本の首都」の意味を捉える上で(3)のような集合の表示が関与することになる。

このように、「指定文」と「潜伏疑問」はともに(3)の集合表示を中核とし、焦点化された要素が変項xの値を指定するのが「指定文」、変項xの値を問うのが「潜伏疑問」と特徴づけることができる。

1.2. 「過不足なく指定」

「指定文」の重要な特性として、Declerck (1988: 28) は焦点化を受けた要素、我々の例(2a)で言えば「東京」が「日本の首都」に含まれる変項を満たす値の過不足ないリストを表すという条件を指摘している¹。「日本の首都」に変項が含まれると

¹ 西山・西川 (2018: 184) は「[「過不足なく指定」]の条件は指定文の規定にとって不要である。」

いうことの意味については2節において説明するが、このポイントは次のコピュラを含む文との比較で考えるとわかりやすいと思われる。

(6) 東京が日本の都市だ。

この文は悪い文ではないが、(2a)と異なり、「ヴェネツィア、東京、釜山の中では」といった選択肢を必要とする「総記」(exhaustive listing)の解釈でのみ可能である。これは、「東京」が「日本の都市」で表される集合の値を過不足なく指定していないためである。他にも該当する都市がいくらかでもあるからである。

(6)が「指定文」ではないことと対応することとして、次の例文を考えてみよう。

(7) ジョンは日本の都市を調べている。

「潜伏疑問」を含む(4a)と異なり、この文の支配的な解釈は、調査対象が日本のある都市(あるいは複数)についてその特性、たとえば歴史、人口などというものである。

(7)の「日本の都市」が「潜伏疑問」の解釈を持たないということは、この表現に含まれる変項の値を与える潜在的な「答え」が変項の値を過不足なく埋めるという、「指定文」の成立の条件と共通するものを満たすことができないためと考えられる。

本論文は、このように平行した特性を持つ「指定文」と「潜伏疑問」の統語構造を、その両者が、2節でその構造を説明する「関数名詞句」から派生することによって明らかにしようとする試みである。

2節で、「指定文」と「潜伏疑問」の統語的派生の中核となる「関数名詞句」と呼ぶ名詞句の構造を示し、3節で「潜伏疑問」を「関数名詞句」から派生する統語的プロセスとその諸相について考察し、「潜伏疑問」の主要部、その統語的範疇について検討する。また、この節では「潜伏疑問」が「疑問節の島」(*wh-island*)の制約の効果を示すことを指摘する。4節では、ある種の「指定文」に見られる「構造的連結性」(*connectivity*)の問題を考察し、その「構造的連結性」が「指定文」が「潜伏疑問」とそれに対する答えからなる構造を持つと考えることで解明されることを示す。5節では「潜伏疑問」の意味的特性について考察し、それらが本論文で展開する統語的分析から帰結することを主張する。

2. 「関数名詞句」の構造

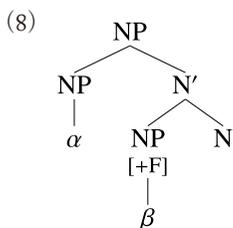
本論文の主張は、「潜伏疑問」が「指定文」と平行した特性を持っているということである。この主張自体は新しいものではなく、Romero (2005)などで主張さ

と断言している。しかし、「過不足なく指定」の要件は西垣内 (2016c) が言い出したことではなく、西山 (2003: 426) の「参考文献」にもリストされている Declerck (1988) をはじめ、Den Dikken (2005) の中でこれを前提とした先行研究がいくつも引用されている。「過不足なく指定」の条件は指定文の定義的特徴と言うべきものである。

れていることであるが、本論文ではこの平行性が意味に関わるだけではなく、統語的特性から帰結するものであることを主張する。

「指定文」および関係する構文の統語構造と意味的特性を明確にする分析が西垣内 (2016c, 2017) で提示されている。これらの論文で一貫して主張されているのは、「指定文」などの構造と派生の中核にあるのは、**その投射の中で**2項をとる名詞を主要部とする名詞句で、これらの論文ではこの名詞句を「中核名詞句」と呼んでいる。「中核名詞句」の主要部は2つの項の間の関係を表すというのが中心的な主張である。本論文の中心課題である「潜伏疑問」(concealed question)の研究の文献では、Barker (2016), Nathan (2006)などで「関係名詞」(Relational Nouns)という用語が用いられている²。しかし、日本語の研究の中で「関係名詞」という用語は、まったく違う意味でとは言えないが村田・長尾 (1997) などに見られる。Caponigro and Heller (2007) は「潜伏疑問」に関わる名詞を Functional Nouns と呼んでおり、その日本語訳「関数名詞」は、特に先例がないようなので、本論文では「**関数名詞**」、その句レベルでの投射を「**関数名詞句**」と呼ぶ。

西垣内 (2016c, 2017) の分析では、「指定文」は次の2項をとる名詞句を中核として派生される³。



- (9) 「関数名詞句」の主要部 N は、外項 α が N の意味的領域を限定 (delimit) し、内項 $\beta[+F]$ が α によって限定された N の意味内容を過不足なく指定する (exhaustively specify) 「値」(value) としての意味内容を持つ範疇である。

この主要部 N のはたらきを意味論的に表示すると、次の述語 P によって示されるものである⁴。

$$(10) \quad \text{Max}(\lambda x.P(\llbracket \alpha \rrbracket, x)) = \llbracket \beta \rrbracket$$

ここで示されているアイディアは、限定する働きを持つ α と P という関係を持つ

² Nathan (2006: 95, etc.) は governor を個体(州など)を項としてとり、個体の集合(その州の知事)を値として返す関数として捉えている。しかし、統語構造との関連性は考えられていない。

³ 統語論で「項」(argument)という時、主要部から付与される θ 役割を持つ名詞句などを指すが、主要部「関数名詞」が必ずしも θ 役割を付与する特性を持つものではない。ここでの「項」は「関数名詞」によってその関係が指定される要素と理解して頂きたい。

⁴ Max 演算子は、Sharvit (1999) などで用いられている、唯一性または最大値を表す演算子である。

もの（さまざまなタイプの実在物）の集合の中で最大の値、もっとも好ましいケースが唯一の存在であって、直感的には外項 α によって限定される P の「値」を過不足なく指定するのが内項を占める β のはたらきである。

この分析では、(2a) の「指定文」の派生は (8) に具体的な言語表現を入れた (11) の「関数名詞句」から始まる。

(2) a. 東京が日本の首都だ。

(11) $[_{NP}$ 日本 (の) $[_{N}$ 東京 (という) $[_{N}$ 首都]]]
[F]

この「関数名詞句」は2項を含み、外項の「日本」が主要部（関数名詞）「首都」の意味領域を限定 (delimit) する。「どこの首都か」を限定するのである。この「日本の首都」の「値」を過不足なく指定する (exhaustively specify) のが内項を占める「東京」である。(6) に見られる「都市」は「首都」が満たす条件を満たさないので、「関数名詞句」の主要部になれないことが、(6) が「指定文」ではないことを説明する。

「関数名詞句」(11) の内項「東京」を焦点化するかわち FocP (Focus Phrase) 指定部へ移動することで「指定文」が派生される。

(12) $[_{FocP}$ 東京 $_x$ が $[_{NP}$ 日本の $[_{N}$ $_x$ $[_{N}$ 首都]]] だ]
[F] [FF]

このように、「関数名詞句」の内項の位置に移動の結果「変項」（空所）が作られる⁵。これによって、「焦点化された要素が変項の値を過不足なく指定する」という、Declerck (1988) などでも繰り返し強調されている「指定文」の本質的な特性が統語構造において捉えられるのである。

「指定文」の派生において焦点化されるのが「関数名詞句」の内項であり、外項ではないということについて、西垣内 (2016c: 第4節) は「自分」の逆行束縛と呼ばれる現象および量化表現による代名詞の変項束縛にもとづく議論を提出している。ある統語的特性が派生によって関連づけられる構造の間で受け継がれる現象を「構造的連結性」(connectivity) と呼ぶが、西垣内 (2016b) では、「自分」についてのより詳しい議論のほか、相対的スコープの解釈、遊離数量詞の現象にもとづいて、(11) の構造を支持する「構造的連結性」の議論が提出されている。

3. 「潜伏疑問」の派生

3.1. 「関数名詞句」からの派生

この節では、前節で概要を示した「関数名詞句」にもとづく、「潜伏疑問」の統

⁵ ここでは、「指定文」の派生に必要な焦点化の移動によって「変項」（空所）が作られるのであり、ある文が「指定文」と解釈されれば、その直観にもとづいて「 $_x$ が・・ナリ」が恣意的に挿入される西山 (2003) の「変項名詞句」とはまったく違うものである。

3.2. 「潜伏疑問」と「島の制約」

前節の(18)で示した本分析での「潜伏疑問」の派生では「関数名詞句」の内項である空演算子 Op が $[wh]$ 素性を持って DP 指定部に移動するという主張をしている。この空演算子が $[wh]$ 素性を持っていることを検証する方法はあるだろうか。この節では「潜伏疑問」をなす DP がその指定部に $Op[wh]$ を持つことによって「疑問節の島」(*wh-island*) を形成することを示していく。このことを見るには、明示的な wh 移動が存在する英語の関連する事実を見ることがわかりやすいと考えられるので、まず英語の「潜伏疑問」が明示的な wh 移動に関して「島の制約」の効果を示すことを観察し、次に明示的な wh 移動のない日本語においても同様の効果が見られることを示していく¹²。

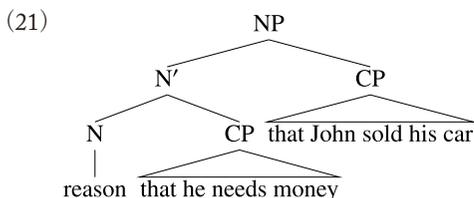
3.2.1. 英語の「潜伏疑問」と「島の制約」

本節では、英語の「潜伏疑問」が前節の(18)で示した構造と派生を持つことを前提として、英語の「潜伏疑問」が「島の制約」の効果を見せることを示す。この目的のために、*reason*, *cause*, *time* など本分析では外項に補文節をとると考える「関数名詞」を含む構文を観察する。

Higgins (1973: 136–138) は *reason* を「2つの補文節をとる数少ない名詞のひとつ」としている。本分析で「関数名詞」のひとつと考える *reason* は、次のような「指定文」で用いられる。

- (20) a. The reason that John sold his car is that he needs money immediately.
 b. That he needs money immediately is the reason that John sold his car.

本分析の枠組みでは、これらの「指定文」は次のような「関数名詞句」から派生される。



Higgins (1973: 138) の言い方では「*reason* の内容を構成する」、本分析では「関数名詞句」の内項を占める CP が焦点化されることで (20b) が得られる。さらに、この内項の位置に空演算子 Op を生成し、(18) のように DP 指定部へ移動することによって、次のような「潜伏疑問」が派生される。

¹² 本論文の分析で仮定する「関数名詞句」を含む「潜伏疑問」の構造が「疑問節の島」を形成するという予測をするはずだという可能性は中島平三、Alec Marantz 両氏（私信）によって個別に指摘されたことである。

(22) Mary is investigating the reason that John sold his car.

この文の his car を wh 表現 which car に置き換え、wh 疑問文を派生しようとする、容認性の低い文 (23a) が得られる。

- (23) a. * Which car did Mary investigate the reason that John sold?
 b. ?? Which car did Mary hear the report that John sold?

比較のために提示している (23b) では、report の補文節からの wh 移動を含んでおり、このような派生は「複雑名詞句制約」(the Complex NP Constraint, Ross 1967) の違反を含むものだが、補文節を含む複雑名詞句からの抜き出しは、3.5 節で考察する関係節内部からの wh 移動に比べて制約の力がゆるやかであることが知られている (Chomsky 1986: 34-35)。そのことによって (23b) の容認性判断が、容認性が高くないが非文とは言えない「??」という表示になっているのだが、英語ネイティブスピーカーは (23a) を (23b) よりさらに容認性が低いという判断をする。次の、Joseph Emonds 氏 (私信) によって提示された time を含む例文においても同様の差異が見られる。文法性の判断も同氏によるものである。

- (24) a. * Which station did journalists know the time the killer had left?
 b. Which station did journalists hear {a / ? the} report that the killer had left?

このように、「潜伏疑問」の中から wh 移動を適用した (23a) , (24a) が補文節を含む複雑名詞句からの wh 移動を適用した (23b) , (24b) より容認性が低いのは、後者が比較的ゆるい「複雑名詞句制約」の違反のみを含んでいるのに対し、(23a) が本論文の分析では次のような構造と派生を持つことによって説明することができる。

- (25) $[_{DP} Op_i [_{D'} D [_{NP} [_{N} \text{reason}] t_i] [_{CP} \text{that John sold } \textit{which car}]]]$
 $[_{WH}] \quad [z_{WH}]$

この構造で wh 表現 *which car* を DP の外へ抜き出そうとすると、DP を越えて移動することによる「複雑名詞句制約」の違反に加え、DP 指定部を占める空演算子が $[_{WH}]$ 素性を持っているとすれば、wh 移動が $Op[_{WH}]$ を越えるという、「疑問節の島」(the *wh*-island constraint) の制約をも破っていると言うことができる。

- (26) ?* What_i did Mary investigate where John lost t_i?

3.2.2. 日本語の「潜伏疑問」と「島の制約」

日本語は、英語などのような明示的な wh 移動を持たない言語であるが、「疑問節の島」(*wh*-island constraint) の効果を示すことが Harada (1972), Nishigauchi (1990) 以来観察されている。Wh 要素が疑問節の中に現れると、疑問節を形成する「かどうか」を越えて wh 要素が文全体にスコープをとり、文全体が wh 疑問文として解釈されることが妨げられるという現象である。

- (27) a. ??タカシは マキが 何について報告書を作成したかどうか 調べているの?
 b. ?*タカシは マキが 何社について報告書を作成したかどうか 調べているの?
 c. ?*タカシは マキが どうやって報告書を作成したかどうか 調べているの?

「疑問節の島」の制約の効果はあまり強いものでないことが知られている (Takahashi 1993) が、数量を表し、他のスコープに関与する表現と鋭敏に反応し合う「何社」のような wh 要素 (Nishigauchi 2002) や、付加表現「どうやって」は比較的強い「疑問節の島」の制約の効果を示す。このことが (27a-c) の容認性の差異の背後にある要因となる。話者によって (27c) の方が (27b) より容認性が低いと判断したり、どちらも変わらないと判断するなどヴァリエーションがあるが、いずれも (27a) より容認性が低いことでは一致する。このことを背景として「潜伏疑問」の中に wh 要素が現れる文を考えてみよう¹³。

- (28) a. ??タカシは マキが 何について報告書を作成した日時を 調べているの?
 b. ?*タカシは マキが 何社について報告書を作成した日時を 調べているの?
 c. ?*タカシは マキが どうやって報告書を作成した日時を 調べているの?

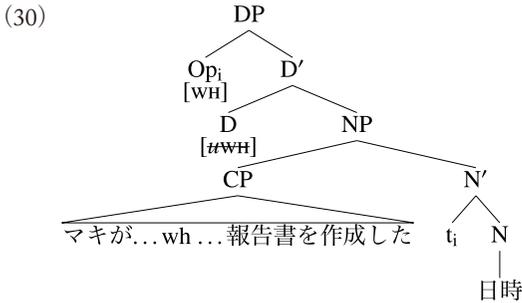
これらは、いずれも「事実」という本論文では「関数名詞」と見なさない名詞を主要部とする補文構造の中に wh 要素が現れている次の文より低い容認性を示す。

- (29) a. タカシは マキが 何について報告書を作成した事実を 確認したの?
 b. タカシは マキが 何社について報告書を作成した事実を 確認したの?
 c. ?タカシは マキが どうやって報告書を作成した事実を 確認したの?

(28a-c) と (29a-c) の間の容認性の差異は「日時」を主要部とする「潜伏疑問」が「事実」を主要部とする補文構造と性質を異にすることを示すものだが、特に注目したいのは、(28a-c) の3つの文の容認性が (27a-c) の3つの文の容認性と平行性を見せている、つまり a 文 b 文 c 文どうして容認性が似通っているということである。このことは、「潜伏疑問」の構造の中に「疑問節の島」を形成する「かどうか」に性質の近いものが含まれていることを示唆する。本論文では、この「疑問節の島」を形成する要素が、(18) で DP 指定部に移動するとした Op であると主張する。

本分析では、(28a-c) に含まれる「潜伏疑問」は、Op 移動を経て次の構造を持っていると考える。

¹³ 査読者のひとり (28a-c) について、「これらの文の主述語「調べている」を、例えば「覚えている」に変えると、容認性が上がるように思われる。」と観察し、Lahiri (2002) の know タイプと wonder タイプの区別が関与していることを示唆している。つまり、「覚えている」が know タイプであることが (28a-c) の容認性を高めるということである。この観察は「かどうか」を含む (27a-c) にも当てはまる。従って、この査読者の観察は (28a-c) と (27a-c) の間の平行性をさらに強める意味がある。Know タイプの動詞の補文において「疑問節の島」の効果が弱まることについては西垣内 (1999: 137-8) に関連する議論がある。



この構造の CP 内の wh が DP 指定部の Op[wh] よりも広いスコープをとる、あるいは Op[wh] を越えて LF で移動すなわち発音に反映されないかたちで移動することが困難であることが、(28a-c) の容認性の低いことを説明する。

ここで Op[wh] の意味的機能は「マキが報告書を作成した日時」の値、つまり時点の集合を表すことである。(28a) のように wh 要素が「何」である時は、Op が表すのが単一の時点であれば、その時点に対応する「A 社の債務に関する報告書」という答えが出しやすいが、(28b) のように wh 要素が「何社」である時は、単一の時点で複数の会社についての報告書を作成することができないという前提では、時点 1 で A 社についての報告書、時点 2 で B 社についての報告書…と対応関係を考えて上で報告書が書かれた会社の数を答えることになり、意味の理解・処理に関わる演算が負荷の重いものとなる。(28c) においては報告書を作成する方法（の値の集合）と時点（の集合）を関連づけることが必要で、演算の負荷が重くなる。

このように、DP 指定部を占める Op[wh] を仮定することで、この演算子と wh 要素の間の相互作用が (28a-c) の容認性の個々のケースについて説明することを可能にする。

3.3. 「潜伏疑問」の主要部

西山 (2003) によって提示されている次の例文に含まれる「潜伏疑問」は、(13a-c) とは異なった構造と派生を持つ。

- (31) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校をきいた。(西山 2003: 79, 例 (47))
 b. 山本教授は、鈴木助教の研究している細菌を問いただした。(西山 2003: 80, 例 (49a))
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとを白状した。(西山 2003: 80, 例 (51a))
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車を尋ねた。(西山 2003: 80, 例 (52a))

これらの例文の下線部はいずれも「潜伏疑問」の意味解釈が可能であるが、その内部構造は、(13a-c)の「関数名詞」を含むものとは異なったものである。

まず第一に、これらの下線部の名詞句が「潜伏疑問」の解釈を許すのは、それぞれの発音される形式の主要部をなす名詞の性質によるのではない。「小学校」「細菌」などに「関数名詞」としての用法があるのではないということである。ここから考えられることは、これらの名詞句の真の主要部は発音される形式のそれではないのではないかということである。

さらに、(31a-d)の下線部の名詞句に「の名前」「の種類」などを付けると、それぞれが意図されると思われる意味に近いものが得られる。

- (32) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校の**名前**をきいた。
 b. 山本教授は、鈴木助教の研究している細菌の種類を問いただした。
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとの名前を白状した。
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車の車種を尋ねた。

本分析の提案は、(31a-d)の下線部の名詞句は「名前」などを含む「識別要因」(identifier)の値の集合を内項とする主要部を持つ「関数名詞句」から派生するということである。この主要部名詞は「名前」などと同じクラスに入るが発音されることがないもので、‘identity’ という意味をもつ ID という要素であると仮定する。

- (33) ID = {名前, 種類, 車種, ∅, …}

ID は個体ないし命題とその「アイデンティティ」の内容, 典型的には名前を含む, 識別要因などとの関係を表す。

3.4. 「潜伏疑問」と統語範疇, 意味タイプ

(31a-d)に見られる「潜伏疑問」の構造と派生を考える前に、それらと関連づけられる「指定文」について検討したい。(31b)の「潜伏疑問」に対応すると考えられる次の「指定文」について考えてみよう。

- (34) a. ビフィズス菌が鈴木助教が研究している細菌だ。
 b. 鈴木助教が研究している細菌はビフィズス菌だ。

このような「指定文」は、西垣内 (2016c) で提案された「指定文」の分析ではその統語的派生を示すことができない。このままでは「関数名詞」が見あたらず、(8)で示された「関数名詞句」の構造からの派生が考えられないからである。

しかし、3.3 節の (32b) で見たように、「種類」「名前」のような「アイデンティティ」を表す「関数名詞」ID を主要部として、「鈴木助教が研究している細菌」を外項、「ビフィズス菌」を内項とする「関数名詞句」を仮定してみよう。

(35) $[_{NP}$ 鈴木助教が研究している細菌 $[_{N'} \text{ビフィズス菌 } [_{N} \text{ID}]]]$

内項を焦点化することで (34a) の「指定文」を得ることができる。

内項の位置に演算子を生成し、これを DP 指定部に移動することで、(31b) の下線部の構造が得られる。

(36) $[_{NP} [_{DP}$ 鈴木助教が研究している細菌 $[_{N'} \text{Op}_x[_{N} \text{ID}]]]$ D \Rightarrow
 $[_{WH}] \quad [uWH]$
 $[_{DP} \text{Op}_x[_{NP} [_{DP}$ 鈴木助教が研究している細菌 $[_{N'} x[_{N} \text{ID}]]]$ D]
 $[_{WH}] \quad [zWH]$

この演算子 Op が λ 演算子と「翻訳」され、それによって「鈴木助教が研究している細菌」の「アイデンティティ」の値 (名前、種類など) の集合を表すことになる。「アイデンティティ」の値という問題については、5.3.3 節で具体的な言語表現について考察する。

「潜伏疑問」の真の主要部が $D[WH]$ であり、発音される形式の主要部名詞ではないことを示すひとつの事実として、代名詞による指示をあげることができる。(31c) の下線部を含む、次の文を考えてみよう。

(37) マリは、ついに { 自分の好きなひと_i / 自分の恋人_i } を白状したが、 { それ_i / *彼_j } はタカシくんではなかった。

「潜伏疑問」としての「自分の好きなひと」「自分の恋人」を指示する代名詞としては、「ひと」を指す「彼」よりも事物を指す「それ」の方が適切である。これは、Mikkelsen (2005), Romero (2005) などによって指摘されている、「潜伏疑問」の主要部が発音される形式の主要部とは異なるものであることを示すひとつの証拠である¹⁴。

「潜伏疑問」が統語範疇として $D[uWH]$ を主要部とする DP をなすという考えは、標準的なものではないが、Grimshaw (1979) によって主張され、Frana (2017) によって支持されている。「潜伏疑問」は意味的に (のみ) 疑問節であって、統語的には名詞句 (DP) であるという考え方には説得力があり、この考えを具現化し、さらに 3.2.2 節で考察した、「潜伏疑問」が「疑問節の島」を形成するという事実を捉えるには $D[uWH]$ の存在を仮定する以外にないと思われる。

Grimshaw (1979) の議論の中心的な部分は述語による選択関係に基づくものである。

¹⁴ 査読者のひとりには「(37) の例文で、「彼」は容認できないが、「その人」にすると容認性があがると思われる」と観察している。これは、(37) の先行する節の述語が「白状する」という叙実動詞 (factive) であり、これによって談話指示対象が確立されるために起こった現象と考えられる。田窪 (2010: 212) は、「対話においてはじめて登場した人物は「彼」では表すことができない。」としている。関連する観察として注 15 を参照。

- (38) a. I {figured out / wonder} what answer he gave.
 b. I {figured out / *wonder} the answer he gave.

疑問節補文を含む (38a) では動詞として figure out, wonder いずれも可能だが、「潜伏疑問」を含む (38b) では wonder を用いることができない。このような観察に基づいて、Grimshaw (1979: 279–80) は統語的下位範疇化 (syntactic subcategorization) と意味的選択 (semantic selection) の区別の重要性を強調している。

Pesetsky (1981) は、この問題を wonder が格を付与する特性を欠くことによるものであり、動詞による選択の問題ではないとし、その証拠に前置詞 about を用いると容認性が高まることを指摘している。

- (39) I wondered about the answer he gave.

これに対し、Frana (2017: 18) は (39) には「答えが何であったか」という「潜伏疑問」の解釈の他に、答えの正否や適切さ、答えた時の意図など、「潜伏疑問」と異なる意味の要因があると観察している。このことから、Frana (2017) は前置詞 about がしていることは wonder が格を与える特性を欠くことを補う以上の意味的な貢献があると推論している。

次の例は、「潜伏疑問」である DP が個体を表す DP と動詞の選択について性質が異なっていることを示している¹⁵。

- (40) a. 自分の好きな人_i を マリは t_i 両親に 会わせ、マキは t_i 友だちに 見せた。
 b. ?* 自分の好きな人_i を マリは 両親に t_i 紹介し、マキは 友だちに t_i 告白した。

いずれも「かきませ」を両サイド適用した (applied across the board) 文だが、(40b) では、2 番目の節の目的語が理解しにくく、文全体の容認性が低い。(40a) では「かきませ」の対象である「自分の好きな人」が「会わせ (る)」「見せ (る)」の目的語であっていずれの位置でも個体レベルの表現であるから「かきませ」の両サイド適用に問題がないが、(40b) の容認性の低いことは「紹介す (る)」の目的語は個体レベルの DP であるのに「告白す (る)」の目的語は命題レベルの表現であり、「自分の好きな人」が異なる意味タイプに関連づけられる位置から移動してきた、不可

¹⁵ Nathan (2006: 57, (3)) は次のような「右節点繰り上げ」(Right Node Raising: RNR) を含む文を用いて、同様のポイントを示している。

- (i) a. Sam told me, and Kim learned independently, the capital of Vermont.
 b. # Sam told me, and Kim has actually visited, the capital of Vermont.

能なステータスを持っていることによって説明される¹⁶。

3.5. さらに「島の制約」

3.2節で、日本語の「潜伏疑問」が「疑問節の島」の効果を示す事実を観察した。では、3.4節で観察したタイプの、IDを主要部としたタイプの「潜伏疑問」は、同じように「疑問節の島」の効果を示すだろうか。

予備的な観察だが、日本語では関係節の内部にwh要素が現れても、文全体のwh疑問文としての解釈が妨げられることはなく、次の例文の容認性は3.2節の(29a-c)の、「事実」を主要部とする連体修飾構造を含む文の容認性とほぼ同じである。

- (41) a. マキはシェフがどこの国から取り寄せたワインを試飲したの？
 b. マキはシェフが何カ国から取り寄せたワインを試飲したの？
 c. ?マキはシェフがどうやって手に入れたワインを試飲したの？

一方、次のように文の述語を「調べた」に変えると、それぞれ「ワインの銘柄」を問う「潜伏疑問」を含む文となり、wh疑問文の解釈の容認性にヴァリエーションが生じる。

- (42) a. ? マキはシェフがどこの国から取り寄せたワインを調べたの？
 b. ?* マキはシェフが何カ国から取り寄せたワインを調べたの？
 c. ?* マキはシェフがどうやって手に入れたワインを調べたの？

(42a)では、1本ないし1種類のワインについてその銘柄を調べたという解釈のもとでは、「どこの国」の答えは「フランス」となり、比較的理解しやすいが、(42b)では、「何カ国」が表す国の集合に基づく数の値、さらにワインの場合、国の数またはそれ以上の本数または種類の数と「潜伏疑問」が表すワインの銘柄の集合の値という、関与する量化表現のスコープ相互作用が、この疑問文の理解を負荷の重いものになっている。(42c)についても、「手に入れた方法」の集合とワインの銘柄の集合を想定した上でスコープ相互作用について演算を行う必要がある、理解と処理がむずかしい文となる。

また、(42a-c)の容認性は、3.2.2節で観察した、「かどうか」の疑問節を含む文(27a-c)で見られた「疑問節の島」の効果と平行した容認性を示しており、(42a-c)の文が(28a-c)と同じ「疑問節の島」の効果を示していることが示唆される。

従って、(42a-c)に含まれる「潜伏疑問」は、3.2.2節で提案した(30)と同じ

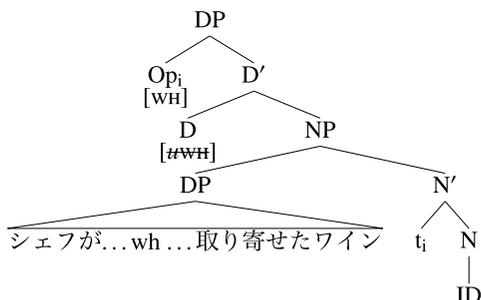
¹⁶ 次のように主語を同一人物にし、「告白する」「紹介する」の順番を入れ替えると、文の容認性が高まる。

- (i) 自分の好きな人_iをマリは友だちに_{t_i}告白し、両親に_{t_i}紹介した。

これは、「告白し」が「叙実動詞」(factive)であり、それによって「談話指示対象」が確立されるので、「紹介した」の目的語は「その人を」のように理解できるためである。

構造を持っていると考えられる。

(43)



(30) と違って、**「関数名詞句」**の外項が**関係節名詞句 DP**であることと、主要部が発音されない**ID**であるということである。

Wh 移動が明示的に適用する英語では、(41a-c) と (42a-c) のような対比は見られない。

(44) *Which country does Maki want to {taste / figure out} the wine that the chef imported from?

動詞として taste が用いられると通常の関係節, figure out が用いられると「潜伏疑問」となるが、その区別と無関係に非文法的な文となる。関係節の内部からの wh 移動じたいが禁じられるためである。

4. 「潜伏疑問」と「構造的連結性」

4.1. 「第3の分裂文」

3.4 節で考察した「指定文」(34ab) について、もう一度考えてみよう。

- (34) a. ビフィズス菌が鈴木助教が研究している細菌だ。
b. 鈴木助教が研究している細菌はビフィズス菌だ。

焦点表現「ビフィズス菌」が「研究している」の目的語と解釈されるという点では、(34b) は次の「分裂文」と共通した性質を持っている。

(45) 鈴木助教が研究しているのはビフィズス菌だ。

このような「分裂文」は、

(46) 鈴木助教がビフィズス菌を研究している。

から統語的操作を行うことで派生することが考えられ、そのことによって「ビフィズス菌」が「研究している」の目的語であることが捉えられる。Hiraiwa and

Ishihara (2012) による「分裂文」の統語的派生では、焦点となる「ビフィズス菌」が FocP 指定部への移動を受ける¹⁷。

(47) [_{FocP} ビフィズス菌_x が [_{FinP} [_{TP} 鈴木助教が_x 研究している] の] だ]。

次に FinP の残余部 (remnant) が主題化によって TopP 指定部へ移動することで分裂文が派生される¹⁸。

(48) [_{TopP} [_{FinP} [_{TP} 鈴木助教が_x 研究している] の]_y は [_{FocP} ビフィズス菌_x y だ]]。

Hiraiwa and Ishihara (2012) は、(34b) のような、前提をなす節の主要部が補文辞と考えられる「の」ではなく「細菌」のような名詞 (句) であるものは、移動による派生を含むのではない、(49) のような「疑似分裂文」であると考えている。

(49) 泥棒が逃げ出した { の / 場所 / 銀行 } は〇〇銀行六甲支店だ。

このような文は、「銀行から逃げ出した」という構造的連結性ではなく、意味的な

¹⁷ (47) をそのまま発音した文は、構造としては「指定文」であるが、容認性が低い。

(i) *ビフィズス菌が鈴木助教が研究しているのだ。

益岡・田窪 (1992: 119) は「のだ」で終わる文について「事態に対する事情、背景の説明を述べる形式」と説明している。(i) のような「指定文」は、前提となる「事態」を表す表現が欠けているので容認性が低いものと思われる。英語では「分裂文」は「指定文」としても「倒置指定文」としても可能である。

(ii) a. A bottle of wine was what John bought.
b. What John bought was a bottle of wine.

英語では Higgins (1973) に代表されるように、「分裂文」を「指定文」の典型として考察するのが普通であるのに、日本語では「分裂文」が「指定文」として使えないということで、このことが日本語の「指定文」の統語構造の研究のあり方に影響を与えていると思われる。

¹⁸ (48) を派生する移動操作は、TopP 指定部に移動した FinP (の残余) 内部に FocP 内にある「ビフィズス菌」が TP から移動した際に作られた痕跡_x を含んでおり、この構造で痕跡_x は「ビフィズス菌」に_c 統御されていない。このことから (48) は「痕跡は束縛されなければならない」という趣旨の適正束縛条件 (Proper Binding Condition: PBC, Fiengo 1977: 45) の違反を含むと考えられる。PBC は次のような非文によって動機づけられるものである。

(i) *[which picture of t_i]_j do you wonder who_i likes t_i? (Saito 1989: 187)

PBC については Abels (2002) などでも批判的に検討されている。(48) に見られる構造は、次のような、Hunter (2012), Takano (2000) などでも議論されている「残余移動」(remnant movement) と呼ばれる現象に近い性質を持っていると考えられる。

(ii) a. [Arrested t_i by the police]_j, John_i was t_i.
b. [Seem t_i to be tall]_j, John_i does t_i.

Hunter (2012) は、概ね (前の移動で) 移動を受けた構成素 (「ビフィズス菌」) の移動先位置と、残余を含む構成素 (FinP 「鈴木助教が_x 研究しているの」) の移動元位置 (y) が同じ最大投射の中にある時のみ「残余移動」が可能であるとしている。(48) では、関与する2つの要素がともに FocP にあるので、この制約によって容認されるものとなる。

関連性（‘aboutness’）にもとづいて成立している分裂文であり、(45) のような統語的派生を想定できるものではない。

しかし、(34ab) のようなタイプの構文は、次に見られるように「構造的連結性」を示す。

- (50) a. 各社_i が訴えた人はそこ_i の顧問弁護士だ。
 b. ?? 各社_i を訴えた人はそこ_i の顧問弁護士だ。

発音される形式では、不定・量化表現「各社」は代名詞「そこ」を c 統御していないが、(50a) では前者が後者の先行詞としての解釈が可能であり、(50b) はその解釈での容認性が高くない。このような現象は、Geach (1962) によって提示されたいわゆる Englishman sentence と同じ問題を提起する。

- (51) a. The woman who every Englishman_i admires is his_i {mother / Queen}.
 b. ?* The woman who spoiled every Englishman_i is his_i {mother / Queen}.

(50a) の場合であれば、その派生の過程で「各社」が「そこ」を c 統御していたポイントがあったが、(50b) ではそのような c 統御が得られることがなかったことが示唆されるが、このような変項束縛に関わる構造的連結性は、西垣内 (2016c: 4 節) で示された分析も含めて、従来十全に捉えられたことがない難問である。

(50ab) は標準的な「分裂文」でもなく、(49) のような「疑似分裂文」でもない、「第3の分裂文」とでも呼ぶべきものであり、(34ab) も「第3の分裂文」としての派生を持つ可能性があるものである。

この考察は「分裂文」の体系全体に関わる大きな問題の扉を開けることになるが、ここでは「第3の分裂文」の派生には、前節で検討した「名前」「種類」など ID というクラスをなす「関数名詞」を含む「潜伏疑問」が関与することを主張する。

4.2. 「潜伏疑問」+ 答え = 「指定文」

「指定文」が疑問文とそれに対する答えがひとつの文の中で実現しているものであるという考えは、Higgins (1973), Declerck (1988), 比較的最近では Den Dikken, Meinunger and Wilder (2000), Romero (2005) などに見ることができる。Declerck (1988: 6) は (52a) の疑問文・答えのペアと (52b) の「指定文」(分裂文) の間の平行性を指摘している。

- (52) a. What did you get? — A book. (Declerck 1988: 6, (6a))
 b. What I got was a book. (Declerck 1988: 6, (6c))

Declerck (1988: 6) はこの平行性を「変項の値を指定する」という「指定文」の本質に関連づけている。

本分析では、(50a) に見られる変項束縛の現象を、この文が次のような「潜伏疑問」とその答えがひとつの文の中で実現した「指定文」として捉えていく。

(53) Q: 各社_iが訴えた人を教えて。

A: そこ_iの顧問弁護士だよ。

より具体的に,

(50') a. Q: [各社_iが訴えた人] は A: [そこ_iの顧問弁護士] だ。

において, Qは3.4節で提案したIDを主要部とする「潜伏疑問」であり, AはQに含まれる関係節と平行した構造を持つDPからQと共通する部分がPFで削除されることによって派生される断片 (fragment) である。(50a)は, さらにこの2つを含む「関数名詞句」から内項をなすAの部分を焦点化することで派生される。

以上をふまえ, (50a)の派生のもととなる「関数名詞句」の派生の概要を示す。この分析では, 「潜伏疑問」およびそれに対する答えの表現に関係節が含まれることが重要なポイントとなるが, 関係節の派生において, 「構造的連結性」を捉える最善の方法として, Vergnaud (1974) によって提案され, Kayne (1994), Bhatt (2002) などで論じられている主要部上昇による派生を採用する。

ステップ1 外項Qと内項Aのもととなる節がそれぞれ独立して派生される。

(54) Q: [_{CP} 各社が人を訴えた]

A: [_{CP} 各社_iがそこ_iの顧問弁護士を訴えた]

この時点で, Aにおいて「各社」が代名詞「そこ」をc統御していることが, (50a)で代名詞束縛の解釈が可能なことの根拠となる。この「構造的連結性」を反映させるのが, 次のステップの主要部上昇による関係節の派生である。

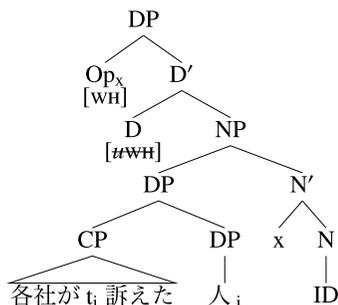
ステップ2 それぞれの節で主要部上昇により関係節化。

(55) Q: [_{DP1} [_{CP} 各社が_{t_j}訴えた] [_{DP} 人]_i]

A: [_{DP2} [_{CP} 各社_iが_{t_k}訴えた] [_{DP} そこ_iの顧問弁護士]_k]

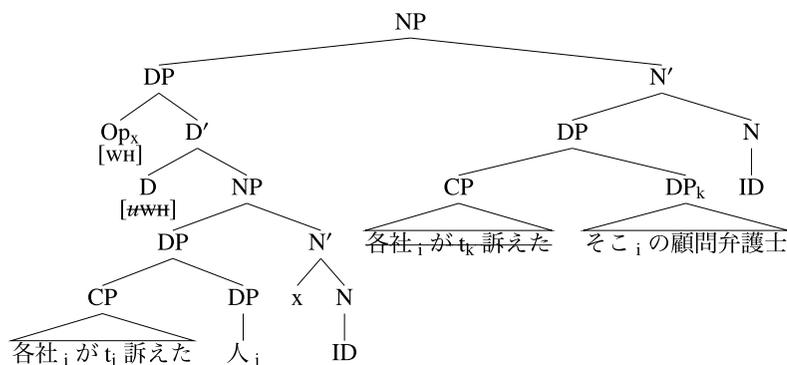
ステップ3 IDを主要部とし, (55Q)の関係節を外項とする「関数名詞句」を形成, 内項OpをDP指定部へ移動することで「潜伏疑問」を派生する。

(56)



ステップ4 「潜伏疑問」の構造 (56) を外項とし, (55A) の関係節を内項とする「関数名詞句」を作る。

(57)



ID を主要部とするこの大きな「関数名詞句」の外項「各社が訴えた人 (は誰か)」の値 (答え) を内項の DP が表している。内項の関係節 CP は外項に含まれる関係節 CP との同一性に基づいて PF 削除を受ける。その内項を焦点化することで、次の「指定文」が得られる。

(58) そこ_iの顧問弁護士が各社_iが訴えた人だ。

「各社_iが訴えた人」を TopP 指定部へ移動することで (50a) が得られる。

この分析は、削除を適用しなければ次のような文に相当する構造を派生するものである。

- (59) a. ?各社が訴えた その顧問弁護士が, {各社 / それらの会社} が訴えた人だ。
- b. ?各社が訴えた人は, {各社 / それらの会社} が訴えた その顧問弁護士だ。

しかし、これらは不必要な繰り返しによる冗長さのため容認性があまり高いとは言

えないだけでなく、査読者のひとりが指摘するように (50a) と意味が同じではない。この点については 4.4 節で検討する。

4.3. 「かきませ」と代名詞束縛

(50b) で代名詞の変項束縛の解釈の容認性が低いことは、その内項が次の、「そこ」が「各社」に c 統御されない構造から派生されることで説明される。

(60) ?*[_{CP} そこ_i の顧問弁護士が各社_j を訴えた]

しかし、(50b) で、代名詞の変項束縛解釈の容認性は、(50a) のそれより劣ることははっきりしているが、(60) が予測するほど低いものではなく、英語の平行すると思われる (51b) に比べていくぶん悪さがはっきりせず、また (50b) を問題の解釈でそのまま容認する話者も存在する。

このことは、(60) に「かきませ」を適用した、次の文で代名詞束縛の解釈の容認性が高いことと関連している。

(61) 各社_j をそこ_i の顧問弁護士が訴えた。

また、(60) の「その顧問弁護士」を主要部とする関係節においても代名詞束縛の解釈はほぼ問題ないものとなる。

(62) 各社_j を訴えたそこ_i の顧問弁護士

A 移動の出力となる構造が量化表現の代名詞束縛の可否を決定することはよく知られていることである。

- (63) a. * It is expected by his_i mother that every boy_j will be encouraged t_j by his teacher.
 b. Every boy_j is expected by his_i mother t_j to be encouraged t_j by his teacher. (Fox 2000: 144)

(63b) では every boy が A 移動 (主語の繰り上げ) によって移動した結果の位置で代名詞 his を c 統御していることで、前者が後者と同一指標を持つことの容認性が (63a) におけるより高いものとなっている。

日本語の局所的「かきませ」は A 移動の性質を持つことが、Saito (1992) などによって主張されている。(61) において代名詞束縛の解釈の容認性が高いことは、局所的「かきませ」が A 移動であることを確認する意味がある。さらに (62) の関係節において代名詞束縛の解釈の容認性が高いことは、関係節の派生に関わる主要部の上昇が、それに先だって適用した「かきませ」の出力を入力としていることによって説明できる。

- (64) そこ_i の顧問弁護士が 各社_i を 訴えた。[かきませ]
 [各社_i を]_x そこ_i の顧問弁護士が t_x 訴えた。関係節主要部移動
 [[各社_i を]_x そこ_i の顧問弁護士が t_x 訴えた] [そこ_i の顧問弁護士]

(50b) の容認性がそれほど低くないことは、その派生の中で、「ステップ4」の(57)の外項を占める「潜伏疑問」と内項を占める関係節のそれぞれの派生の中で「かきませ」を適用すれば(64)で示したプロセスが起こる可能性によって説明することができる。また、英語の(51b)の容認性が(50b)のそれに比べ低いことは、英語に日本語と同じ「かきませ」がないことによって説明される。

一方、次の文では(50ab)よりも代名詞束縛解釈の容認性にはっきりとした差があると思われる。

- (65) a. 各社_i が 国税庁が 調査することを要求した人物はそこ_i の顧問弁護士だ。
 b. ?*各社_i を 国税庁が 調査することを要求した人物はそこ_i の顧問弁護士だ。

これは、(65b)の派生において「かきませ」が適用し、「各社」が代名詞「そこ」をc統御する位置に移動したとしても、代名詞束縛の解釈が成立しないことが関与している。

- (66) ?*[各社_i を]_x そこ_i の顧問弁護士が 国税庁が t_x 調査することを要求した。

(66)では「各社を」が節を越えて「かきませ」によって移動している。このような移動は長距離「かきませ」と呼ばれ、A'移動の性質を持つと考えられている(Saito 1992)。A'移動においては、代名詞の変項束縛に関与するのは移動を受ける要素の移動以前の位置すなわち痕跡の位置である。

- (67) ?*Who_i did his_i mother spoil t_i?

(67)では、wh要素の痕跡tが代名詞hisをc統御していないことが同一指標の解釈が容認性が低いことを説明する。「弱交差」(weak crossover)と呼ばれる現象である。(66)で代名詞束縛の解釈が得られないのは、(67)と同じ「弱交差」の効果が出ていることによる。

さらに、(66)から「その顧問弁護士」の主要部上昇によって関係節を形成しても、代名詞束縛についてよい結果は得られない。

- (68) a. 各社_i が 国税庁が 調査することを要求したそこ_i の顧問弁護士
 b. ?*各社_i を 国税庁が 調査することを要求したそこ_i の顧問弁護士

(66)から主要部上昇によって形成した関係節(68b)は、(68a)に比べ代名詞束縛に関して容認性が低い。

本論文の分析では、(65b)の派生の過程で、(57)の「関数名詞句」の内項を占める関係節の派生で「かきませ」を適用したとしても(68b)を含まなければなら

ないことが (65b) の代名詞束縛の容認性が低いことを説明する。

4.4. 先行研究との相違

本分析では, (50a) に見られる代名詞束縛の「連結性」を「答え」に相当する構成素に対する音韻上の削除によって捉えるという点で Romero (2005) と共通するところがある。しかし Romero (2005) では「答え」に相当する節に, 焦点を表す構成素を残して削除を適用するという方法をとっている。

(69) ..._{CP} 各社_i がそこ_i の顧問弁護士を訴えた]

この派生は構成素をなさない不連続な言語要素を削除するという異例のものである。

Den Dikken, Meinunger and Wilder (2000: 47-48) は「答え」を表す節で焦点要素を前置し, 前置された要素以外を削除する派生方法に言及している。これによって削除の対象を構成素とすることはできるが,

(70) * What John did was buy some wine, he did.

のように削除のソースとなる構造が非文法的であることなどを指摘し, 前置+削除の派生方法に対して否定的な見解を示している。この分析では, 前置のあと削除が義務的に適用することを規定 (stipulate) しなければならない。

本分析では, (55) で示すように, 「疑問」と「答え」を表すそれぞれの節で関係節化が適用し, (57) のように内項の関係節 CP を削除するので, 通常どおり構成素を削除するものである。

また, 本分析では代名詞束縛を含む「構造的連結性」を関係節名詞句を主要部上昇による派生で捉えており, 関係節の削除が適用しない場合, (59) のように冗長さ, 不要な繰り返しのために好ましくない文を派生することになるが, (70) のように削除を義務的と規定する必要はない。

- (59) a. ?各社が訴えた その顧問弁護士が, {各社/それらの会社} が訴えた人だ。
b. ?各社が訴えた人は, {各社/それらの会社} が訴えた その顧問弁護士だ。

査読者のひとりには, これらについて, 「(50a) と同一の意味を持つとは考えにくい。(59ab) の文の自然な解釈は, 「訴え」が少なくとも二度あり, 「各社が訴えた人は, 各社が以前訴えたその顧問弁護士だ」のようなものである。」という興味深い観察をしている。

これは, 削除における同一性の要求に関する重要な観察である。(50a) の派生においては, (57) で削除が適用される時, 関与する2つの言語表現に含まれる「訴えた」の「時」の解釈に関連する素性の同一性が削除に課せられる同一性の一環として成立していなければならない。そのため, (50a) においては「訴え」は1回である。それに対し, 削除が適用しない (59ab) においては, 発音されるそれぞれの「訴えた」が独自の「時」の素性を持つことが普通の解釈となる。これが査読者が観察す

る、(59ab) では異なった「訴え」が2回起こったという解釈につながっていると考えられる。

従って、問題の意味的な差異は削除が適用しなかった場合に起こる意味的な現象に関わるものであり、削除そのものの義務性とは直接関係しない。さらにこの現象は削除に課せられる同一性の条件について洞察を与えるものである。

5. 「潜伏疑問」の意味的特性

5.1. コピュラ文の多義性と「潜伏疑問」

この節では「潜伏疑問」の意味的特性を考える。

「潜伏疑問」と明示的な wh (間接) 疑問文の間にいくつか重要な意味の差異があることが、Heim (1979) 以来たびたび指摘されている。そのひとつについて考えてみよう¹⁹。

- (71) a. タカシは誰が『門』を書いた作家かわかった。
b. タカシは『門』を書いた作家がわかった。

たとえば、文学の授業で、配付資料にいくつかの文学作品からの抜粋が並んでおり、それぞれそれを書いた作家の名前は示されていないとしよう。この文脈で、(71a) と矛盾しない少なくとも2つの理解のしかたがある。1つは、タカシがわかったのは夏目漱石が『門』を書いた作家だということである。「漱石がこれの作者だ!」という風に。もう1つの解釈は、タカシがわかったことは、その文体の類似性から、『虞美人草』を書いた作家が『門』の作者と同一人物だという解釈である。「これの作者{は/が}これの作者だ!」という風に。この場合、タカシは『門』を書いた作家が夏目漱石であることを知っている必要もない。

この(71a)の多義性は、コピュラ文「誰が『門』を書いた作家であるか」の多義性の表れにすぎない。つまり、1番目の解釈はコピュラ文の「指定文」としての解釈であり、2番目の解釈は、想定される答えが「これ(=『虞美人草』)の作者がこれ(=『門』)の作者だ」なら「同定」(identificational)、「これ(=『虞美人草』)の作者はこれ(=『門』)の作者だ」なら「同一性」(identity)を表す文の解釈となる。

一方、(71b)は、タカシがわかったのは夏目漱石が『門』を書いた作家だという「指定文」の解釈のみが可能である。この観察から、西山(2003: 78-86)による考察は、「潜伏疑問」である「『門』を書いた作家」を「変項名詞句」という、「命題関数」と言うが実態は束縛されない変項を含むコピュラ文「xが『門』を書いた作家だ。」に言い換える、つまり意味の限定された「潜伏疑問」を多義性のあるコピュラ文に言い換えるものであることがわかる。

¹⁹ Heim (1979) の他、Nathan (2006: 33), Frana (2017: 20-21) などで John found out (who was) the murderer of Smith. で、明示的な wh (間接) 疑問文には「指定文」と「同一性」を表す解釈の多義性がある旨の主張がある。

西山 (1990) は (77ab) のような文を「指定文」と考えているが、「これ」のような文脈指示語を用いるコンピュータ文は、複数の意味において「指定文」ではなく、「同定」(identificational) を表すものと考えらるべきである (Declerck 1988: 95, Den Dikken 2005: 299, Higgins 1973: 236–240) ²³。

Higgins (1973: 9–10) の次の例に関するコメントは、別の角度から「指定文」の本質に光を当てるものである。

(78) What I'm pointing at is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, (12))

この文の「指定文」としての解釈は That (animal) is a kangaroo. (Higgins 1973: 9, (13)) と文脈指示語を補って言い換えられるものである。それに対し、「指定文」としての解釈においては what I'm pointing at は何も指示するものではなく、この文を理解するには「指さし」も不要で、会話の相手は電話の会話であっても話者の意図を理解することができる (Higgins 1973: 10)。これは a kangaroo という記述が文脈と無関係の「識別要因」として what_x I'm pointing at _x の変項の値を指定しているからである。一方、「これが山田の本だ。」はテレビ電話が必要である。

「これ」だけではなく「山田の本」も問題である。それは次のようなことを考えてみると明らかになる。

(79) が山田の本だ。

この空白部に「これ」「それ」などの文脈指示詞以外に何を入れることができるか、ということである。「一番分厚いの」などは可能だが、それは目の前に何冊か本が並んでいる場面が想定されるからである。「『草枕』が山田の本だ」は可能だが、それは目の前に『草枕』、『三四郎』、『こゝろ』などが並んでいる場面を想定しなければならない。さらに、ここが大切な点だが、それぞれの本が1タイトルずつならんでいることが必要で、『草枕』が2冊あればコミュニケーションは成り立たない。「山田の本」には唯一性がなく、文脈指示表現や、そこにある『草枕』によってのみ「山田の本」の唯一性が確保できるからである。つまり、文脈に依存せずに「山田の本」を識別することができないのである。

一方、(77b) は、「これ」が主語であれば「指定文」とは言えないが、重要なことは主語が「これ」ではない、「識別要因」を適切に表せる表現なら「指定文」を作ることができるということである。

(80) 『草枕』が山田の一番好きな本だ。

この文が成り立つために、その場面に本が並んでいる必要はないし、『草枕』が2

²³ 西山・西川 (2018: 179) は「西垣内 (2016c) の言う中核名詞句を基盤に据える指定文の分析では、[(77a)] のような、外項を有さない名詞句を主要部として含む文を指定文として予測できないことになり問題である。」としている。本論文の立場から言えば、指定文ではないものを指定文として予測できないから問題であると言っていることになる。

冊あってもさしつかえない。文脈に依存せず「識別要因」を示すことこそが「指定文」の本質的な特性である。

このことに対応して、次の「潜伏疑問」に関連する対比がある。

- (81) a. ?みんなは山田の本がわかった。
b. みんなは山田の一番好きな本がわかった。

(81b)は「潜伏疑問」を含む文として可能である。それに対し、(81a)は「潜伏疑問」のように聞こえるもの＝「疑似潜伏疑問」を含んでいるというべきである。(81a)は、上で「指定文」ではないと言った(77a)と意味的に平行しており、目の前に数冊の本が並んでいる状況で、「これらの本の中でどれが山田の本かわかった」という解釈しかできない。[*何が山田の本か]は不可能であり、この差はきわめて重要である。これが(81a)を「潜伏疑問」のように聞こえるものと言ったゆえんである。

西垣内(2016a)は、このような「潜伏疑問」のように聞こえるものを次のような名詞句から派生するものであることを提案している²⁴。

- (82) [_{DP} Op_x [_{NP} (この文脈の中での) [_{N'} x [山田の本]]]]

この構造では、西垣内(2016c)が「花子がこの病院の看護師だ」のような、「指定文」のように聞こえるがそうではない、「総記」を表すコピュラ文を分析するために提案した「談話演算子」である「この文脈での」を「関数名詞句」の外項の位置に置いている。内項の演算子移動で作られた変項の「値」は「この文脈の中で」によって限定される「山田の本」という「関係」を持つものの集合となり、その「値」は「これ」「それ」など、文脈指示表現に限られる。これが、(81a)の解釈についての直感を説明する。ここで「談話演算子」がしていることは文脈・場面の中での「唯一性」を確保することである。連体修飾構造を伴う「山田の一番好きな本」は文脈の助けがなくても「唯一性」が理解される。そしてこのことが「山田の一番好きな本」が「潜伏疑問」として解釈されることの基盤となっている。

(81a)の、「潜伏疑問」のように聞こえるがそうではない解釈を(82)の表示のように「談話演算子」を用いることについては、日本語と英語の「指定文」、「潜伏疑問」のあり方について、意外とも言える経験的帰結を持っている。それは、(81a)の、日本語では「潜伏疑問」のように聞こえる文を英語で考えると「潜伏疑問」としてはまったく不可能であるということである。

- (83) a. We found out John's book.
b. We found out which is John's book.

²⁴ (82)のN主要部には「山田の本」という通常は句レベルであるものが置かれている。西垣内(2016c:159)は、影山(1993)を引用して「[先祖の墓]参り」vs.「*[御影石の墓]参り」のように、「相対的な概念を表す名詞」が含まれる名詞句は語彙レベルの名詞と同じようにふるまうという議論をしている。

(83a) は、目の前に本がならんでいても (83b) と解釈することは不可能である。つまり、(83a) は「潜伏疑問」のように聞こえることもないのであり、この日英語の差異を捉える要因を、(82) の「談話演算子」の存在にもとめることができる。

「談話演算子」は Huang (1984) によって、中国語、日本語など（彼が *cool languages* と呼ぶ）談話依存的な空代名詞が許される言語を、そのような空代名詞を許さない英語などと区別する要因として提案されたものである²⁵。その存在が日本語の (81a) を「潜伏疑問」のように聞こえさせ、その不在が英語の (83a) をそのように聞こえさせないとすれば、(82) の「関数名詞句」の構造が日本語では可能で英語では不可能であるというポイントに帰結させることができる。これが上で述べた「意外とも言える経験的帰結」である。

5.3.3. さらに、「アイデンティティ」

前節までの議論から、どのような言語表現が「潜伏疑問」として使えるかを予測する道筋が見えてきたと言える。「潜伏疑問」を成り立たせる2つの要因は (i) 唯一性、(ii) アイデンティティである。この節で議論してきたのは、主に「唯一性」の条件だった。

「アイデンティティ」の問題を考える上で、次の文の差異を考えてみよう。

- (84) a. 先生がいつも使う万年筆が知りたい。
b. 先生がいつも使う鉛筆が知りたい。

今の世の中で「万年筆」ということばが普通に用いられるか疑問だが、このことばには実用よりも嗜好品に近い響きがあり、モンブラン、ペリカンなどのブランド名が識別要因になりやすい。一方、鉛筆の場合メーカー名が問題になることは、特に鉛筆に関心のある人でない限りないのではないだろうか。しかし、この文がデッサン教室で、先生が使う鉛筆の硬さ（濃さ）が興味の対象であれば、先生が使う鉛筆が B なのか 2B なのかという「潜伏疑問」と解釈することが可能となる。ここでも、鉛筆の硬さ（濃さ）が記述（ことば）で表せる識別要因としての特性であるということが重要なポイントである。

次の文は、「疑似潜伏疑問」を含む文としての解釈が普通である。

- (85) 友だちが建てた家が思い出せない。

この文が使えるのは、友だちが建てた家を訪ねようとしているが、どれがその家か思い出せない、道に迷った状況が普通である²⁶。これは、一般人が建てる家には名

²⁵ Huang (1984) の主張に対しては Nakamura (1987) などの批判がある。

²⁶ 査読者のひとりは (85) は

(i) 友だちが建てた家が何か思い出せない。

前がついていないので、文脈の中でのみ有効な「あれ」を「識別要因」として使うしかないのである。しかし、次の文は「潜伏疑問」として理解できる。

(86) 1910年にG.トーマス氏が建てた家が思い出せない。

この場合、問題の家には「風見鶏の館」という名前がついており、その名前が思い出せないという意味である。

6. 終わりに

この論文では「潜伏疑問」が「指定文」と平行した特性を持つことを主張してきた。この平行性はRomero (2005)などで意味的な考察の中で強調されてきたことであるが、この論文で示してきたことは、「潜伏疑問」と「指定文」の間の平行性は統語的な特性に根ざすものだという点である。

この論文で扱った言語現象は、従来形式意味論の分野で議論されているもので、その内部の統語構造に本格的に踏み込んだ研究は皆無であったと言える。この論文で示したことは、統語構造の考察が「潜伏疑問」の微細な意味的側面に光を当てるということである。また、ここで示した統語構造に関する提案は、形式意味論に取り入れることが十分に可能なものであり、ここで提案した統語構造を前提とした分析を行うことで、形式意味論の研究に新たな局面が生まれることが期待できる。

と解釈できるとしている。しかし、その場合「何」の答えになり得るのは 2×4 か、鉄筋かといった建築物としての属性になるのではないだろうか。それに対応する：

(ii) ?? 2×4 が友だちが建てた家だ。

は「指定文」として容認性が低いと思われる。これは、 2×4 のような属性は種類を識別する要因であって、個体を識別する要因ではないからである。5.3.2節で見たHiggins (1973)の例文(78)も、次のように変えると「指定文」としての解釈は不可能になり、「指さし」の必要な「措定文」となる。

(iii) What I'm pointing at is a marsupial.

つまり、a kangarooは「種」(species)を表し、人間社会では個体を識別する要因として使えるが、a marsupialは上位概念の「類」(genus)を表し、個体の識別要因とはなれないのである。

参考文献

- Abels, Klaus (2002) On an alleged argument for the proper binding condition. *Proceedings of HUMIT 2001*, 1–16.
- Baker, C. L. (1968) Indirect questions in English. Ph.D. dissertation, University of Illinois.
- Barker, Chris (2016) Why relational nominals make good concealed questions. *Lingua* 182, 12–29.
- Bhatt, Rajesh (2002) The raising analysis of relative clauses: Evidence from adjectival modification. *Natural Language Semantics* 10(1), 43–90.
- Caponigro, Ivano and Daphna Heller (2007) The non-concealed nature of free relatives: Implications for connectivity in specificational sentences. In: Chris Barker and Pauline Jacobson (eds.) *Direct compositionality*, 237–263. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT press.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Den Dikken, Marcel (2005) Specificational copular sentences and pseudoclefts. In: Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax* 4, 292–409. Malden, MA: Blackwell Publishing.
- Den Dikken, Marcel, André Meinunger and Chris Wilder (2000) Pseudoclefts and ellipsis. *Studia Linguistica* 54(1), 41–89.
- Fiengo, Robert (1977) On trace theory. *Linguistic Inquiry* 8, 35–61.
- Fox, Danny (2000) *Economy and semantic interpretation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Frana, Ilaria (2017) *Concealed questions*. Oxford: Oxford University Press.
- Geach, Peter Thomas (1962) *Reference and generality*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Grimshaw, Jane (1979) Complement selection and the lexicon. *Linguistic Inquiry* 10, 279–326.
- Harada, Kazuko (1972) Constraints on *wh*-Q-binding. *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5, 180–206.
- Heim, Irene (1979) Concealed questions. In: Rainer Bäuerle, Urs Egli and Arnim von Stechow (eds.) *Semantics from different points of view*, 51–60. Dordrecht: Springer.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2012) Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15 2, 142–180.
- Huang, James C.-T. (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15, 531–574.
- Hunter, Tim (2012) A constraint on remnant movement. In: Anna M. Di Sciullo (ed.) *Towards a biolinguistic understanding of grammar: Essays on interfaces*. Amsterdam: John Benjamins.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房。
- Karttunen, Lauri (1977) Syntax and semantics of questions. *Linguistics and Philosophy* 1 1, 3–44.
- Kayne, Richard S. (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lahiri, Utpal (2002) *Questions and answers in embedded contexts*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』東京：くろしお出版。
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular clauses: Specification, predication and equation*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- 村田真樹・長尾真 (1997) 「意味的制約を用いた日本語名詞における間接照応解析」『自然言語処理』4, 2: 41–56.
- Nakamura, Masaru (1987) Japanese as a pro language. *The Linguistic Review* 6, 281–296.
- Nathan, Lance Edward (2006) On the interpretation of concealed questions. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Springer.
- 西垣内泰介 (1999) 『論理構造と文法理論：日英語のWH現象』東京：くろしお出版。
- Nishigauchi, Taisuke (2002) Scrambling and reconstruction at LF. *Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 121, 49–105.
- 西垣内泰介 (2016a) 「変項名詞句」としての「量関係節」「潜伏疑問」「主要部内在型関係節」『国立国語研究所共同研究プロジェクト（基幹型）『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』平成27年度 研究報告書』3: 118–138.

- 西垣内泰介 (2016b) 「指定文」の統語的特性」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 19: 101–122.
- 西垣内泰介 (2016c) 「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137–171.
- 西垣内泰介 (2017) 「変項名詞句」の統語構造」 *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 20: 127–142.
- 西垣内泰介 (2019) 「地図をたよりに」の構造と派生」『日本語文法』19(1): 37–53.
- 西山佑司 (1990) 「カキ料理は広島が本場だ」構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』22: 169–188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』東京：ひつじ書房.
- 西山佑司・西川賢哉 (2018) 「指定文の分析において「中核名詞句」なる概念はどこまで妥当か」『言語研究』154: 177–204.
- Pesetsky, David (1981) No title. Unpublished manuscript.
- Romero, Maribel (2005) Concealed questions and specificational subjects. *Linguistics and Philosophy* 28(6), 687–737.
- Ross, John Robert (1967) Constraints on variables in syntax. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Saito, Mamoru (1989) Scrambling as semantically vacuous A'-movement. In: Mark Baltin and Anthony Kroch (eds.) *Alternative conceptions of phrase structure*, 182–200: University of Chicago Press.
- Saito, Mamoru (1992) Long distance scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1(1), 69–118.
- Sharvit, Yael (1999) Connectivity in specificational sentences. *Natural Language Semantics* 7 3, 299–339.
- Takahashi, Daiko (1993) Movement of *wh*-phrases in Japanese. *Natural Language and Linguistic Theory* 11(4), 655–678.
- Takano, Yuji (2000) Illicit remnant movement: An argument for feature-driven movement. *Linguistic Inquiry* 31, 141–156.
- 田窪行則 (2010) 『日本語の構造：推論と知識管理』東京：くろしお出版.
- Vergnaud, Jean-Roger (1974) French relative clauses. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of technology.
- 山泉実 (2019) 「極性疑問が潜伏している名詞」『日本言語学会第 158 回大会 予稿集』302–308.

執筆者連絡先：

〒 657-0015

神戸市灘区篠原伯母野山町 1-2-1

神戸松蔭女子学院大学大学院言語科学専攻

e-mail: gauchi@shoin.ac.jp

[受領日 2018 年 4 月 1 日

最終原稿受理日 2019 年 11 月 4 日]

Abstract**Structure and Derivation of the Concealed Question**

TAISUKE NISHIGAUCHI
Kobe Shoin Women's University

The present paper argues that the specificational sentence (SPC) and the concealed question (CQ) derive from what we call the Functional Noun Phrase (FuncNP) which has the specific structure in which the head FuncN denotes a relation between its two arguments, where the outer argument delimits the semantic domain (range) of FuncN R, and the inner argument exhaustively specifies the semantic domain of FuncN delimited by the outer argument. With the inner argument moved to SpecFocP, we obtain the SPC. The present paper derives the CQ in a way strikingly parallel with the derivation of the SPC: We posit Op as the inner argument of the FuncNP, which is moved to SpecCP. It is shown that the CQ exhibits the effect of the *wh*-island constraint both in English and Japanese. A syntactic analysis of the Englishman sentence is presented.